

分科会	中2年	都市名	岡崎
提案者	岡崎市立北中学校		伴 巨 裕

1. 研究主題

『持続可能な社会の実現を目指し、学びを問い合い、自己の責任を考える社会科の授業』
 ～2年生歴史単元『戦争と国民生活 ～岡崎にも空襲があった～』の実践を通して～

2. はじめに

岡崎市の社会科部は研究テーマ『持続可能な社会の実現を目指し、学びを問い合い、自己の責任を考える社会科の授業』を受け、昨年度から研究実践してきた。昨年度の研究を通して得られた成果と課題は、次に示す通りである。

<p><実践単元> 3年 「人権と共生社会」真のバリアフリーを考える</p> <p><成 果> ・生徒たちが実感的に抱いた追究課題を設定すれば、高い興味関心をもって教材と出会い、事象に対する問題意識や追究意欲を高めることができた。</p> <p>・話し合いを踏まえて、自分が学習してきた足跡を振り返る場を設定したことにより、生徒自身の考え方の成長を実感させ、今後の在り方を考える契機となった。</p> <p><課 題> ・話し合いの中で、根拠をもとに自分の考えを伝えられない姿や、友達の考えと練り合わせ深化させることができない姿がみられた。</p>
--

3. 研究主題のとらえ

研究テーマ『持続可能な社会の実現を目指し、学びを問い合い、自己の責任を考える社会科の授業』についての定義づけに際して、クラスの生徒の実態をとらえ、願いをかけ、そこから研究の方法を具体的に以下のように考えることで、本研究の構想を考えた。

- ・**持続可能な社会の実現を目指す**…「平和な社会」という人々がより良い生活が送れるような社会の在り方を考え、その実現を目指すこと。
- ・**学びを問い合う**…確かな調べに基づいて構築した自分の考えを友達とかかわらせて、社会事象をとらえなおし、自分の考えを見つめなおし、考えの確かさや変容に気づくこと。
- ・**自己の責任を考える**…社会事象を理解し、事象に対して、自分たちがすべきことは何かを考えること。

≪研究の仮説と手立て≫

【仮説1】 岡崎の空襲を教材化し、当時の人々の思いに迫る単元構成を工夫すれば、課題に対してより切実感をもって取り組むことができるだろう。 ⇒単元構成の工夫

手立て① ⇒身近な地域素材の教材化
 岡崎大空襲を教材化する。白菊特攻隊一等飛行兵曹の体験手記を読んだ時に出てきた疑問・関心を取り上げ、学習課題になるように方向付けをする。

手立て② ⇒追究意欲を高める学習課題づくり
 生徒たちの感性を刺激する当時のモノ（軍服・焼夷弾・金属回収令状）などを提示することで、具体的な事実から抽象的な認識へと追究活動にはずみをつけるよう工夫する。

手立て③ ⇒継続的な体験者への聞き取り活動
 市民グループ『岡崎の空襲を語る会』会長さんを教室に招くなど講師の方と継続的なかかわりを単元に組み込むことで、実感的な考えの構築を促す。

【仮説2】 戦争体験者とかかわる調べ活動を通して、戦時中の社会的事象を具体的に調査し、資料を効果的に活用すれば、学びを問い合うための考えの足場を構築することができるであろう。 ⇒追究を深める支援

手立て④ ⇒追究に必要な資料支援と資料提示の工夫
 岡崎市社会科郷土読本の読み取り・岡崎市自作ビデオ『戦争と国民生活』・岡崎むかし館を利用するなど、生徒の追究の継続を支える効果的な資料支援と資料選択の工夫。

手立て⑤ ⇒意図的指名を活用した話し合いの授業の工夫
 なかなか自分の思ったことを発言できないクラスの実態を考慮し、個の考えが分かる思考の一覧表を活用し、意図的指名を活用して話し合いを進めていく。

【仮説3】 戦争中の国民や軍人の立場で、平和を願う生き方を考える話し合い活動の場を設定すれば、多様な戦争観にふれ生徒の歴史認識が深まり、自分たちの学びを生かし、平和に関する社会参画の意識を高めることができるであろう。 ⇒かかわり合う場の充実

手立て⑥ ⇒平和宣言文の作成とその発表会の場の設定
 生徒たちの意識を共有する宣言文作りの場を設けることによって問題意識を高め、それぞれが平和に関する社会参画の意識をもてるようにする。

持続可能な社会の実現を目指す

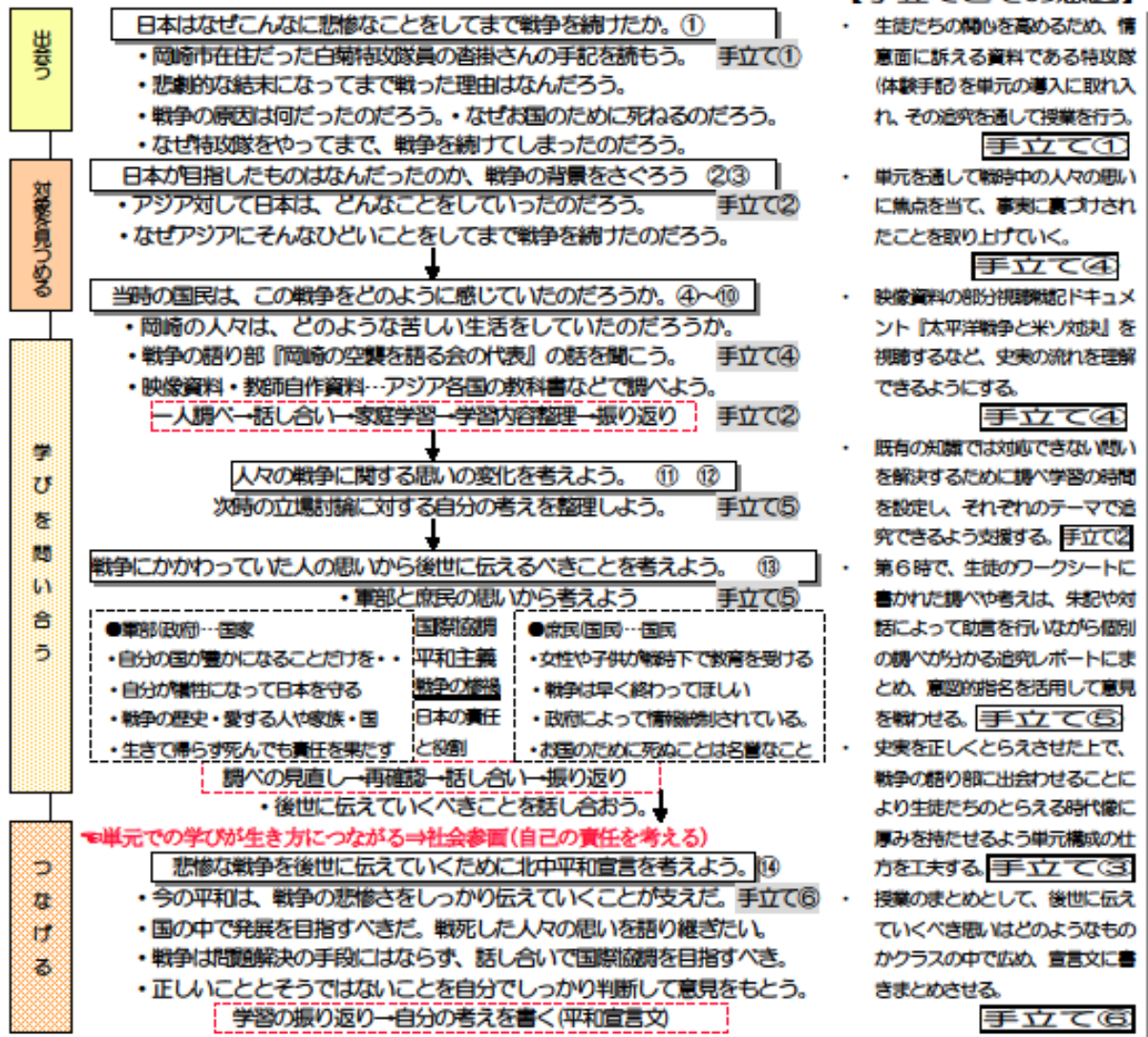
めざす生徒像

- 身近な戦争の事例から平和の尊さを感じ、平和を守っていこうとする姿勢をもてるようになった生徒
- 多様な視点から歴史を見つめ、根拠のしっかりした意見を戦わせる中で歴史に対する互いの思いや考えに迫れる生徒
- 平和への願いを実現するために、人としての生き方や在り方を具体的にイメージし、他者に伝えようとする生徒

戦後 65 年を目前にした本年度。歴史単元において、話し合いの仕方やかかわり合いの在り方を工夫することに主眼を置き、前年度の反省に立った継続研究という視点から実践を行った。自分の考えをなかなか言い出せない生徒に対して、個々の考え方を一覧表に落とし、意図的指名を活用して意見を戦わせようと試みた。様々な考えにふれることによって、幅のある歴史認識を養いたいと願って本実践を行った。

単元の目標

- ① 15 年戦争について意欲的に学び、平和な国際社会を創っていかうとする意欲を持つ。
- ② 15 年戦争の背景・原因・様子・結果・影響等を多面的にとらえた上で、語り部の話や資料を効果的に活用して戦時中の市民生活について調べ、調べたことを自分の言葉でまとめることを通して戦争の悲惨さと平和の尊さについて考えることができる。
- ③ 15 年戦争終結までの歴史的過程を理解し、国際社会は戦争の惨禍から国際平和を希求していることを理解することができる。



4. 抽出生徒

抽出生徒として、A男、B子の二人の変容を追いながら、仮説に対する手立ての有効性を検証していくことにする。二人の実態と教師の願いは以下の通りである。

- | | |
|----|--|
| A男 | …自分の考えはもっているのだが、普段の授業の中では発言も少なく、控え目な生徒である。戦争に対する意識調査では戦争は悪だという一般的な判断にとどまっている。課題解決に臨む生徒Aを授業で取り上げ、核として話し合いを活発に展開させたり、A男の誠実な発言を他の生徒に聞かせ、クラスに広げることによって、他の生徒の戦争や平和に対する認識や感じ方を高めていきたい。 |
| B子 | …自分の興味があることに対しては、とても積極的で集中して物事を考えるが、普段は集中力が欠けており、友達の意見も聞き逃すことが多い。岡崎が空襲を受けたことを知らない。本単元では、B子の調べを生かしながら、戦争に対する思いを深めさせ、意欲を持続させたい。 |

5. 研究実践

①白菊特別攻撃隊一等飛行兵曹の体験手記の読み聞かせを聞く生徒たち ～教材との出会いの場～(第1時)

史実をより身近なものとして実感させるために、岡崎に在住した白菊特攻隊の沓掛さんの体験手記を読み聞かせた。「なぜ日本はこんな悲惨な戦争をしたのか」という単元を貫く学習課題を醸成させるためである。昭和20年、特攻隊に志願し徳島に集結。沖縄への飛行予定が悪天候のため中止になったという内容である。出撃時の様子が克明に描かれている手記を読み、疑問や感想を聞いた。B子は「今から死にに行く特攻隊の人たちに対して、周りの人が感謝して見送っている日本人の心境がよくわからない。」という感想をもった。A男は「なぜ特攻隊を使ってまで、日本は戦争をしなければならなかったのか。」という感想を書いた。多くの生徒は、「特攻隊の人は本当に国のために死にたいと思ったのだろうか。」など「なぜ避けられなかったのか」という感想や疑問をもった。そこで、その疑問を追究していくという方向性で学習を進めることにした。以下の資料1の「次の世代に伝えないと…。」という感想からも、自分たちの問題意識としてとらえ始めた姿が分かる。

沓掛さんが飛行機に乗って沖縄の方へ出て行こうとして、飛行機に乗ろうと思ったら、戦争が終わっていたという話だけど、実際今は本当にあのとき飛行機に乗って行かなくて良かったと思う。もしかしたらこの体験文集も書けなくて今に伝わっていないから。だから私たちは、沓掛さんのような思いをした日本人がいたということを次の世代に伝えないと…。	【資料1 B子の授業日記】
--	---------------

②「日本が目指したものは何だったのか戦争の背景を探ろう。」～活動により認識を深める場～(第2時～3時)

第2時では、15年戦争の時系列をしっかりと押さえられるよう整理をして、史実の流れを理解できるようにしていった。戦時中の人々の思いに焦点を当てる際、事実に裏付けされた思いを取り上げていきたいと考えたからである。その課題把握となる第2時では、アジアで日本がとった行動を学習し、学習課題を共有化していった。戦争に対する認識をより多面的にするためには、特攻隊や被爆、苦しい国民生活など、日本人が受けた悲惨さを取り上げるだけでは不十分と考えた。そこで、日本の被害のみでなくアジアの諸国民の被害にも目を向け、加害の視点も生徒に与えることにした。教育ビデオを視聴したり、南京事件について別の資料で考えさせたりした。

A男	国際連盟を脱退してファシズムを優先して、中国を攻めていってしまったことについて僕はおかしいと思う。なぜなら、罪もない中国を攻めたからです。日本はとても悪いことをしたんだなあと思った。	【資料2 学習記録から】
B子	日本人が犯した中国人・韓国人への仕打ちは何もすごく残酷なもの。日本は、日中戦争でいけないことをしたつげがまわってきたのだと思います。日中戦争では、日本が突き進んでいったのでいいけれど、中国にしてみれば、一番つらいと思う。	【資料3 学習記録から】

A男もB子も資料2・3の波線部から、中国などアジア諸国に日本が行った加害者的な立場の側面も理解していた様子が伺える。

③「当時の人はこの戦争をどのように感じていたのだろうか。」～調べ活動I～(第4時～10時)

第3時では、戦記ドキュメント『太平洋戦争と米ソ対立』など4種類の映像を用意し、見たい映像を視聴できる環境を整えた。環境を整えることで、資料に主体的に向き合い、意欲的に読み取っていく姿を願った。この時点では、生徒たちの戦争に対する意識は、まだ身近なものではなかった。そこで、「空襲」というものが岡崎にもあったという事実を知らせ、戦争をより身近に感じられる手立てとして、「岡崎の空襲を語る会」の香村会長さん(資料4)を教室へ招待した。終戦前の7月20日に岡崎の大空襲があったことを詳しく話してもらった。紙芝居や空爆で落とされた焼夷弾など実物を多数見せてもらった。遠くにあった空襲の概念が香村さんという一岡崎市民の体験に裏打ちされた、具体的な内容となった。資料5・6から読み取れるように、



【資料4 焼夷弾を手に語る香村さん】

香村さんに話を聞いたことでとても心を動かされたようだった。

A男	なんで当時の学校の先生は、生徒を陸・海軍に志願させるようなひどいことを平気でしたのか…。 【資料5 学習記録から】
B子	…戦争中、人々は防空すきんを作ったりして自分の命を守るために努力していることがわかりました。 【資料6 学習記録から】

また、お話だけでなく、岡崎になぜ空襲があったのかという実態を視覚的に実感させたいと思い、教師側が資料支援という手だてを打った。香村さんの話を聞く前に、岡崎の郷土読本を利用し、全員で読んで概要を明らかにしたり、岡崎の大空襲を取材した自作ビデオ『戦争と国民生活』を視聴させたりした。こうして生徒たちが戦争を国民生活の視点で見るようになってきたことが以下資料7・8の学習記録から伺える。

A男	香村さんの話で、自分の思っていた戦争の考えが甘いものだということがわかりました。…香村さんは戦争展を開いているらしいから、今日聞けなかったことを聞いてみたい…。 【資料7 学習記録から】
B子	国が負けそうな時、国民が兵になって戦うということを聞いて、家族にとってはよいことはなかったんだなあと思った。なぜ国民は「戦争をやめるべき」と言えなかったのか。 【資料8 学習記録から】

さらに、当時の国民生活の調べを支援するために金属回収についての現物資料を提示した。これらの資料に接し、戦争をより身近なものとしてとらえ始めた生徒は、「当時の人々の生活の様子」について様々な視点で調べを進めていった。この学習で、生徒たちは、第一に、戦死者の多さに率直に驚き、資料9のA男「戦争なんかのために」という怒りなど、戦争反対を綴っている感想が多く見られた。生徒たちが国民生活の様々な視点で調べ学習を行った。そして空襲の背景・配給制・死者数など、調べをクラスで共有化していった。

また、なぜ岡崎市が空爆の対象になったかに疑問を抱いた生徒は、軍需工場が近くにあり、名古屋の街道筋にある岡崎も爆撃の対象になったことを聞き取りから明らかにしていった。しかし、香村さんの話を聞けば聞くほど、「普通の家まで爆撃しなくても」と無差別的な爆撃という事実に対して、前時までの意識が変化していく様子を書き表わされている。(下記資料9・10より) 香村さんとかわかり、話を聞いて、以下のような生徒の感想に違いが見られた。

A男	香村さんの紙芝居を見て、岡崎もあんなに焼け野原になったんだととても恐ろしく思った。他にも・・・岡崎でこんなにたくさん死んでいるのに、世界ではどれだけの人が死んだのかと思うと、戦争は絶対してはいけないと思った。それと15才の人が死んでいるのにびっくりした。せっかく生まれたのに、戦争なんかのために死んでかわいそう。 【資料9 学習記録から】
B子	目の前で家族が死んだり、家が燃えて壊れていくのを見るのはとてもつらいだろうなと思いました。 【資料10 学習記録から】

④「人々の戦争に関する思いの変化を探ろう。」～調べ活動Ⅱ～(第11時～12時)

第4時～6時でその後の調べのまとめを終え、自分の考えを整理し、第一次のかかわり合いの時間を設けた。「戦争は悲惨だ」という一面的なとらえだけでなく、「なぜ戦争に踏み切らねばならなかったか」という視点からも戦争をとらえさせようと考えたからである。より多面的に戦争について考えるために、新たな資料を与えた。戦争の実態に対する認識を深めるために、資料を提示した。この資料から生徒は、戦争を始めた年と終わった年の

・・・中略・・・	
C1	(日本)国民全体が負けたと思わないように…。
C2	うその情報を流して戦争を続けていた。
C3	勝ちたい一心でお国のために頑張った。 ・・・中略・・・
T1	それでも戦争しつづけなきゃいけないかったの?
C5	日本は引き返せなくなったんだと思います。
C6	アメリカの方がだいぶ有利だった・・・。
T2	この資料を見てください。(資料提示) この資料を見て気づいたことは?
C7	兵力が明らかに違う。
C8	アメリカの方が断然強い!・・・
C9	終戦間近になると急激に死者数が増えている。
T3	なんでかな?
C10	日本は、劣勢だったのにわかかわらず、戦争を続けようとした。
C11	石油資源が足りなくなると国民生活に影響が出てしまうから、ぎりぎりまで粘った…。
【資料11 授業記録一部 (第11時中盤から)】	

の日本の兵力格差を読み取った。1943年あたりからは、アメリカが決定的に優位であることを生徒たちは理解していった。次に、アメリカと日本の戦争は、1944年からはかけてのマリアナ沖開戦でほぼ決着がついてしまっていることを証明する資料を提示した。資料11の授業の流れから、「それでも日本人は必勝を信じていたのか」「なぜもっと早く終わらなかったのだろうか」という疑問を学習記録に書いてくる生徒が多くみられるようになった。

C11のように国民生活の視点で意見が出されるのは、岡崎の空襲の学びが生かれているとみることができる。生徒は、日本や世界の戦死者の莫大な数字を類推し始めた。(次項資料12・13より) 様々な資料を提示したことで、A男は資料12の「勝つわけでもない戦争」ととらえ、B子は資料13「日本は勝てる見込みがなくなっていたのに戦争を続けた」という認識に変わっていった。A男もB子も、岡崎の空襲での学びを生かして日本及び世界全体の戦争の被害の甚大さへと考えを広げていった。また、「こんな戦争に反対した人はいないのか?」とか「なぜこんな戦争を始めてしま

ったのか？」という新たな問いが生まれてきた生徒もいた。

岡崎市で戦死したのでも250人亡くなっているんだから、全国ではすごい数だと思った。そして空襲などで死んだ人なども入れるともっとすごい数になると思いました。勝つわけでもない戦争のために、何百人もの人々を失って、今でもその戦争のために苦しんでいる人もいます。だからこの苦しんでいる人のためにも、戦争は絶対してはならないと思った。

【資料12 A男の学習記録から】

岡崎からいろいろな戦場に飛び立っていることに驚いた。岡崎市でもこれだけなら、日本中や世界中ならどれだけだろうと思った。岡崎の空襲が全国で10番目に大きいものだとすることを初めて知った。日本は勝てる見込みがなくなっていたのに、戦争を続けた。そのために1944年前後には、本当にたくさんの方が亡くなっている。沖縄が占領され、本土でも空襲をたくさん受け、とどめに広島と長崎に原爆が落とされて、最悪の状態になって降伏した。先を見定めてもっと早く降伏していれば、もっと少ない犠牲者ですんだのにと考えた【資料13 B子の学習記録から】

⑤「戦争にかかわっていた人の思いから、後世に伝えるべきことを考えよう」

～自分の見方・考え方をもち生徒～(第13時)

前時までの調べや資料をふまえて、当時の国民の戦争に対する思いを考え発表させた。生徒は前時までの調べた内容をもとに、「軍部の人」と「国民(庶民)」という立場別に意見を発表した。立場別にするによって様々な立場の人の意見に触れ、自分の考えを深めることができることを意図して行った。発表の際には、自分の考えた根拠がわかるように気をつけて発表させていった。生徒は、友達や自分の調べを足掛かりに、追究レポート集を活用して意見を述べた。

座席表を使って、生徒一人ひとりの考えをつかみ、意図的指名を活用しながら話し合いを進めていった。軍部の「思い」に対して、国民の立場に立った「思い」が少なかった。「戦争は本当はいやだったけど、やりたくないとは言えなかった」などと意見が述べられた。中には、「自分だったら絶対にやらない」と毅然とした姿勢を見せた生徒に対して、「国家総動員法など、当時の様子を考えると自信がない。」とかかわる発言を引き出すことができた。

A男は、庶民の「思い」の立場で、「軍人は、国民から物資を奪った」と発言した。また資料14C5下線部B子の「国のために死ぬのは当然だ」(軍部)とA男の「遺族のなかには国のために死んだのは名誉である」と考える人もいたなどの発言からは、軍部の思いと庶民の思いが共通していることもあったという意見が出てきたことが分かる。これは、意図的指名を活用したことが有

(・・・中略・・・)

C1(軍)日本が豊かになるためだから、国民も戦争をすることに納得していたのだと思う。

T 豊かになって具体的にどうのこと？

C2(軍)アメリカとの戦争に勝って資源を得ること。

C3(国)日中戦争でも勝っていたから次の戦争でも勝てると思っていた。勝てることを信じて戦った。

T 日本は何を目指していたの？

C4(軍)大東亜共栄圏。

C5(軍)お国のために死ぬのは当然だと思われた。

C6(国)今までの戦争は勝ち続けている。歴史は物語っている。

C7(国)国のためでもあるし、日本人(庶民)のためでもあると思います。

T これに関してどう思う？

C8(軍)国のためっていうけど、国民は「戦争はやりたくない」とは言えないと思う。非国民と言われるし、国家騒動員法もあるので仕方ない。

C9(国)つかまったり、殺されたりするのがいやで。

【資料14 授業記録 一部(第13時)前半部】



効に働いたということができ、この実践で手立てを講じた成果であった。

授業前半の話し合いを受けて、「後世へ何を伝えるべきか」という課題について討論した。すると、「自分の意見を自由に言える社会体制づくり」や「国と国はきちんと話し合う(国際協調)」、「他国との交流を深める(国際交流)」など多様な答えが出てきた。これらのことから、これまでの学習が、この授業に生きていることを表していると言える。戦争とか平和という言葉を使わないで、伝えたいことを発表できた。

生徒たちは、話し合いが進んでいくにつれて、戦争の問題を考えていく上でキーワードとなっている言葉「平和」に注目し始めた。次頁の資料18からは、A男が、今まで学習してきた内容を生かして、平和を維持する方策を自分でしっかり表していたことが学習カードから読み取れる。また、資料18の波線部からは、B子の調べが、この討論で自分の考えを支えるしっかりとした根拠になっていたことが分かる。



【資料15 発表するA男】

また、意図的指名が中心で授業が進んでいったが、教師が個の考えを事前に座席表に落とし、じっくり把握した上で、意見発表させたことで、普段から消極的な生徒も意見を言いやすくなった。資料16のT1は、生徒の学習記録を事前に把握し、話し合いの展開の中で意図的に指名している。この教師の出から、C5の波線部「他国との交流をもっともっと深めていかなければいけない」という意見を引き出した。それに対して、すぐに教師は「今の平和にあぐらをかいてはいけな」と生徒の意見を認め、称賛する形で意見の発表を流した。生徒が考える「思い」を、意図的指名によって引き出した好例である。

この後、どうしたら後世に伝えることができるか、その手立てを学級全体で考えていくことにした。そして、自分たちの平和に対する考え方を外へ発信していこうということになった。生徒たちは今まで継続的にかかわってきた香村さんに感謝の気持ちを込めて、平和な社会を作るための自分たちの決意を考えていく活動へと入っていった。

- C1(国)あの戦争があったからこそ今の平和があるので、兵隊さんたちが命を捨てて守った日本を大切にしていきたい。
- C2 戦争の怖さを伝えていきたい。
- C3(国)国民のことを「本当に」考えるということ、「中心に」考えるということ。
- C4 きちんと国と国とが話し合うべき。
- T1 難しい言葉で「国際協調」ってノートに書いてくれた子がいたよね。
- C5(国)今は平和だけれど、いつ戦争が始まるかわからないからも他国との交流をもっともっと深めていかなければいけないと思います。
- T2 今は平和だけれど、それにあぐらをかいてはいけなということだね。
- C6(国)再び戦争を起こさないようにしたい。
- C7(国)戦争は国のためにというけれど、何も解決していかなし、解決されない。
- C8(軍)資源をめぐって今でも戦い(争い)が起こっているから、それをやめさせていければいいと思う。
- C9(軍)この戦争があったからこそ、今の日本人は平和でいられると思う。
- C10(軍)だから、戦死してしまった人の思いを受け継いで、平和を訴えていく必要があると思います。・・・つづく・・・

【資料16 授業記録 一部(第13時)後半部】

A男	戦争では何も解決しないということを中心に、僕たち若い世代の人が、これからの未来に伝えていきたいし、資源不足が原因で絶対に戦争がおきないように国にできるように呼び掛けたい。 【資料17 学習記録より】
B子	<u>私か調べてみて、一番後世に伝えたいことは、二度と同じことが繰り返さないようにすること。</u> 正しいこと、そうでないことを自分たちでしっかりと判断し、自分の命を大切にすることだと思います。もしかして将来、資源をめぐって争いごとがおこるかも知れません。そうなる前に、仲良く話し合う環境、分け合う環境を作っていかなければならないと思います。 【資料18 学習記録より】

⑥ 「自分たちの北中平和宣言を考えて地域に発信しよう」～自分の考えを磨く・まとめる話し合い～

これまでの授業内容を受けて、平和な社会を実現するためにどうしたらよいか、後世に伝えていく手立てを宣言文に表した。短冊に一人ひとつずつワンセンテンスを宣言文として書かせていった。

地域への発信も視野に入れ、本当に自分たちがこの戦争の学習をして勉強になったこと、地域の人々に訴えたいこと、という条件をつけて考えていった。一つの齟齬を提示し、それをもとにクラスの平和宣言文にしようまとめる形をとった(次項右側)。そして全てが出そろったところで、内容項目が似かよっているものをいくつか仲間分けをして選んでいった。

この段階で、どの子の宣言文をクラスの宣言文に取り入れたいか、という視点で話し合いの時間を設定した。A男はC7の発言を受けて、「話し合い」という民主的な意見を出してきた。次項の授業記録の発言は、友達同士のかかわり合いで、どの意見を取り入れるかを話し合った。傍線や波線部がクラスの宣言文の候補になった意見である。B子は、友達の意見にかかわって、自分の宣言文の内容を友達の前で堂々と発表する姿があった。

この活動は、単元を通して学びを振り返り、自己の考えを表出するのに適した時間となった。問題意識が継続したうえで、生徒たち一人ひとりに達成感を与える実践になったことが伺えた。A男も「自分の意見をしっかりと、間違っていることはちゃんと言う」という、しっかりと自分の意見を発表することができた。そしてクラスの宣言文に取り入れられることになり、学ぶ喜びをクラスで分かち合うことになった。

資料19の記録の中にも、宣言文に対応した発言が、いくつか出てきていることが分かる。また、資料23のA男の学習記録には友達から(授業記録資料C1:「戦争の犠牲、戦争の悲惨さを忘れずに」)のよい考え方が取り入れられている。授業後も成就感に満たされていた。生徒の意識の連続を最優先させて、学級全体で取り組むことのよさが実感できた。

・・・前半部分略・・・

T ・・・みんなが考えてくれた宣言文の中でどうしてもこれは取り上げたいというもの、友達のいい部分を教えて下さい。
・・・中略・・・

C1 戦争の犠牲・戦争の悲惨さを忘れずに、国々との争いを避け、一人一人が助け合って生きていきたい。
・・・中略・・・

C2 二度と戦争はしないということ。

C3 岡崎の大空襲を忘れないということ

C4 香村さんの願いを受け継ぐということ。15年戦争にたずさわってきた軍人さんやその家族の思いや苦しみを消し去らなようにしたい。
・・・中略・・・

C5 今の自分がいかに幸せな生活を送っているのかということを、いつも胸の奥にしまい生活していきたい。

C6 戦争が今、現在にいろいろ教えてくれたことを忘れずにこれからは命を大切にし続けていく。
・・・中略・・・

C7 戦争は暴力で解決しようとするけど、暴力じゃなくて話し合いで解決していかなくてはならないと思います。

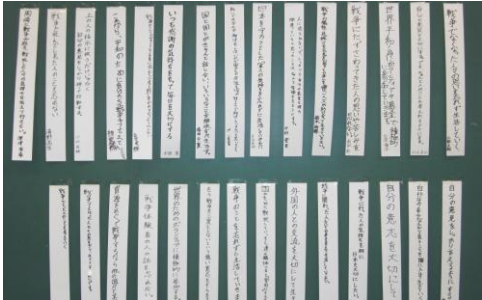
A男 C7と似ていて、そのためには、話し合いをするためには大切なことがあって、人に流されなくて、しっかりと自分の意見を持ち、間違っていることはちゃんと違うと指摘することが大切だと思います。
・・・中略・・・

C8 武力はだめで、話し合いで解決できることはしていきたい。

C9 結局、武力を使ったって何も解決できないんだから…戦争をしてきた人たちの思いをのこしていかなければいけないと思う。

B子 日本を守ろうとした軍人たちの気持ち（国を愛する気持ち）を忘れずに生活していきたい。・・・つづく・・・

【資料19 授業記録 一部（第14時）後半部】



岡崎市立北中学校 2年4組 平和宣言文

今、日本では普天間基地移設が話題となっています。私たちは、歴史で戦争と国民生活について勉強しました。教室に来てお話をしてくださった語り部の香村さんは、目の前で死んでいった友達のことなどを思い出し、「戦争を二度としてはいけない」「岡崎の空襲のことを忘れてはいけない」という思いの強さで、語ってくださいました。その思いをしっかりと受け止め、平和な社会を作るために、自分たちができていることをしていきたいと思います。

普通の学校生活のなかで、すぐに「死ね」とか「うざい」とか口に出す人が多いのですが、もっと人のことを考えて言葉を選ぶことが大切だと分かりました。こういう小さなけんかが大きな戦争に発展していくのだと思います。争いごとをなくすために、私たちが心がける事はたくさんあると思います。

まず一つ目は、人を大切にするということです。戦争は一瞬にして多くの人の命を奪ってしまいました。多くの人を悲しませました。もう二度とあのような事は起こってはいけないので、それを今、自分たちも一人一人を大切にして生きていきたいです。

二つ目は、一日一日を大切にするということです。戦争が起きている頃は、いつ死ぬか分からない中でみんな生きていました。今は、明日を迎えられる事はすごいことだと思って毎日暮らしていきたいです。そのためには、つまらない事で人を傷つけたり自ら命を絶ったりすることは許されないと思います。人も自分も大切にしていきたいです。

三つ目は、人の考えや意見、想いを受けとめるという事です。自分の思っている事だけを相手におしつけるのではなく相手の気持ちを考えていきたいです。何事にも大きな心をもって行動していきたいです。

このように私たちにもたくさんできる事があるということが分かりました。自分たちで学習したことをもとにそれらを生かしていきたいです。人種、宗教関係なく世界の人が仲良くしあえるような世界になってほしいです。今、自分たちがいかに幸せな生活を送っているのかということを考え、毎日生きていきたいです。心から安心して暮らせる世界をみんなで作っていただきたいと思います。・・・今ある命を大事にしていく・・・して私たちが力を合わせて、平和な世の中を作っていくと、ここ「平和の砦（とりで） 2年4組」にて宣言します。

平成22年3月23日 岡崎市立北中学校2年4組一同

【資料20 かかわり合いで生まれた2-4 平和宣言文】

資料21の学習記録は、この学習終了時に書かれたB子のものである。戦時中に生きた人々の考え方・行動の仕方を、現代社会を生き抜くヒントとしてとらえ始めている姿であろう。波線部「考え方が違った」からは、この戦争の時代の特徴を、また、「戦争がやめられなかった事情」からは、今とは考え方が違う故にそうせざるを得なかった理由についてつかんでいることが分かる。

このような感想を残して、太平洋戦争を含む15年戦争の学習が終わった。生徒は、戦争を身近なものとしてとらえられるようになり、戦争をいろいろな立場で考えられるようになった。さらには、国民生活の視点まで入り込んで考えられるようになった結果、現代を生きる自分たちがとるべき行動にまで意識が高まっていた。

・・・今と違い、命を国のために使うのが当たり前になっていた時代だったのが、考え方が違ったので、当時は戦争をやめられなかった事情がよくわかりました。当時の戦争がただ、負けた戦争としてではなく、その戦争が今、現代に投げかけているものをしっかりとつかんで生活しなくてはいけないと思いました。・・・

【資料21 B子の学習記録より】

6. 研究の成果と課題

I. 仮説1～単元構成の工夫によって、課題に対してより切実感をもった取り組みになったか～

単元最終時に書いた「戦争の学習を終えて」でB子は、資料22の波線部「いろいろな戦争を見て」から、単元を通しての意識や意欲が持続した様子が表われている。自分の見方・考え方をしっかりもって歴史事象をとらえ始めている。一つは、日本だけのことを考えず、他国との関係について述べている点である。二つ目は、「私が生きて普通の生活を送っている…」という記述から、今の自分の生活を振り返り、将来の自分の生活に生かそうとしている点である。今後の生活を高めるために動き始めようとするB子の姿が感じられる。単元を通して学習できたことに充実感を感じ、興味・関心をもって、主体的に学習に取り組めたと思われる内容である。また、軍人・国民という立場で、戦争について話し合いを行った結果、うわべだけの戦争観から、より身近に、より切実感をもって戦争について考えることができた。波線部「戦争なんか…(中略)…とても甘く考えていました。」という資料23のA男の感想からは、単元全体を通して自分の学びを振り返り、内面を見つめることができた。この様な姿から手立て①・手立て②・手立て③は有効に働いたとみることができる。

今までいろいろな戦争を見て勉強して思ったことが二つあります。一つは、戦争のきっかけというのは、最初はとてもささいなことから始まっていたということです。もっと話し合っ、どちらかの国が一步後ろに引いていれば、起こらなかった戦争もあったと思います。二つ目は、昔の国民は、とてもつらかったのだなあということが分かりました。今私たちの住んでいる日本は、戦争もなく平和ですが、昔は、苦しい生活をしていただと思うと、私が生きて普通の生活を送っているのだということに当たり前と考えるはいけないと思います。 【資料22 B子】

戦争について詳しく学習する前は、戦争なんか軍人同士が戦っていて国民はそんなに影響を受けていないんじゃないかととても甘く考えていました。しかし、学習する過程で、「沖縄では、住民が三万人近く死んでしまった」ということを学んでとても印象付けられました。ほくは、戦争の犠牲や悲惨さを忘れずに後世にずっと受け継いでいかなければいけないと思いました。また、世界の国々との争いを避けるためにも、積極的に他国で困っている人の助けになるように、募金やボランティアで活動するようにしたいと思う。 【資料23 A男】

II. 仮説2～戦争体験者への継続的な調べ活動の充実、学びを問い合うための考えの足場を構築させたか～

資料支援の方法の工夫の手立て④と、意図的指名を有効に活用するという手立て⑤によって、A男やB子は以下のように変容した。このことから、手立て④・手立て⑤は概ね有効であったと考えられる。しかし、かわり合いの授業では、意図的指名を活用することによって、生徒たちに与えられた自由度が低くなり、生徒同士の思いを互いにぶつけ合うまでには至らなかった。この点で「学びを問い合う」という仮説に迫り切れなかったところが課題として残った。今後は、生徒たちの調べを効率よくさせ、考えの足場をより強固なものにしたうえで、教師が生徒の発信する限界を低く見積もることなく授業の流れを生徒に任せつつも行ってほしい。そして、より生徒をかかわらせることで、生徒たちを一時間の授業の中心に据えた実践を構想していきたい。

《単元前》 資料による深い調べがなく、一面的なものの見方しかできていない。興味関心を抱き始めた生徒

A男	日本は、戦争に負けて世界でただ一つの原爆が落とされた国……今の幸せは戦争のおかげ。
B子	なぜ特攻隊の人たちは、死を恐れずに戦うことができたのか知りたいです。

《単元後》 資料の提示の工夫によって追究意欲が 持続し、上辺だけの認識から、深い認識をもち始めた生徒

A男	同じ過ちを繰り返さないためにも、戦争では何も解決できないことを、後世の人に伝えたい。
B子	私が一番に残っていることは「話し合う」ということ。世界がもっとお互いに交流をすべき。

III. 仮説3～平和を願う生き方を考える話し合いの場の設定によって、社会参画の意識を高めたか。～

今回、生徒は、自ら地域の歴史事象について調べる学習活動に取り組んできた。すべての学習を終えて、生徒の中に、「戦争の悲しさ、命の大切さなどがよく分かった。今の自分は甘えている・・・幸せだと思わなくては。」と綴る子もいた。国のために命を捧げざるを得なかった戦争時代の本質的な部分を理解しながら、今の自分を振り返っている。また、前項資料19のかかわり合いの中で、C9は「結局、・・・何も解決できない。」と歴史は物語るという意味にも似た感想をもち、初歩的ではあるが確かな歴史観をもつことができた姿であろう。振り返りカードや授業の様子から、当時の人々の努力や生き様に対して生徒の考えを発表し合ったことで、国際協調や国際平和の実現に努めることの大切さに気づくことができた。これは、「平和」というキーワードを掲げ宣言文を作るという手立て⑥によって生徒の意識が高まりを見せた結果、社会参画に向けての土台が形成され始めたとも見てよいであろう。

7. 終わりに

クラスみんなで作った平和宣言文を、香村さんへ来校のお礼と共に送り届けた。折しも新聞で、香村さんが『岡崎の空襲体験文集合本版』を発売と報道された。後日、この平和宣言文を市民グループの機関紙『草の根』に載せて、地域に発信をしてくださる予定である。今後も、生徒たちの実感を伴う地域の素材を使って戦争と平和の学習ができるように、授業研究を深めていきたい。そして生徒の学びが深まる実践を継続していくことで、共に成長していく教師でありたい。